

大学生、高校生の動き

被爆者の高齢化が進む中、高校生や大学生の新しい動きが出てきています。

6月に会館を訪れ被爆者の話と会館の成り立ちを聞き、展示を見て意見交換をした北大生（「平和ミュージアムから考える戦争と平和」の受講生）たちが、7月28日、授業で新しい展示のプレゼンテーションを行いました。

ひとつのグループはいまの展示の一角に、北海道の被爆者個人の歩みがわかる展示を設けること、もうひとつのグループは展示の説明文をもっと工夫する必要があると考える具体案を提示しました。会館からもメンバーが参加、貴重な改革意見をいただいて帰りました。



また7月29日には、会館を引き継いだ北星学園の女子中高の生徒6名が、被爆者の話を聞き会館の説明を受けて展示を見学、私たちに何ができるかとグループごとに討議し、さまざまな気づきを発表してくれました。

貴重な朗読CDを寄贈

NPO法人札幌リーディングサービス「朗読110番」の皆さんは、かねてから視覚障害者のために、被爆者の証言を朗読しCDに収める取り組みをしてこられました。このほどそのお仕事が完了、7月23日に代表桑原準子さんから4名が来館し、



被爆者の証言集全5巻の全編（57時間53分！）を朗読したCD5枚セットをセンターに寄贈して下さいました。事務局では近いうちに、必ずや朗読を聞く機会を持ちたいと話合っています。

平和を愛する仲間たちとともにー

三世代で語る平和の集い

7月28日、新婦人札幌南支部は23回目の「三世代で語る平和のつどい」を開きました。

被爆者の大村一夫さんが原爆投下直後の広島の様状、原爆は被爆者の心にどんな影響を与えたかを子どもを含む120人に語りました。



絵本の朗読や合唱、むかし遊びもあり、参加者は子どもとともに平和

の大切さを学びました。
今年も赤紙配り

8月15日の終戦の日、平



和民主団体で構成するさっぽろ平和行動実行委員会は、かつて否応なく戦場に駆り出された若者がいたことを忘れないようにと、札幌駅南口で通行する人々に赤紙（召集令状の複製）を配り、各団

体の代表が平和の大切さをアピールしました。被爆者連絡センター代表の宮本須美子さんも「ふたたび被爆者をつくってはならない」と訴えました。

ピースフォーラムinチ・カ・ホ

8月21日、コップさっぽろが「ピースフォーラムinチ・カ・ホ」を地下歩行者空間で開催。センター代表宮本須美子さんが長崎で被爆した自らの体験を語りました。

また札幌南高校定時制有志の皆さんは、ヒロシマ、ナガサキ篇とともに、第五福竜丸の被爆を描いた「あの日あの時 あゝの海で」の朗読劇三部作を一举に上演、万雷の拍手が寄せられました。

スタディツアーで広島を訪問した子どもたちが、被爆



について学んだことを報告しました。